ISSN 0918-1954

アルパック ニュースレター

朽木温泉“てんくう”がオープンしました（本文中に関連記事があります）

アルパック　ニュースレター　もくじ　　1995年9月1日

●朽木温泉“てんくう”オープン …… 2
●アルパックCMづくりにトライ …… 4
●宝塚市震災復興計画に携わって …… 6
●ドラゴンレース健闘記 …… 7
●うまいもの通信⑱ …… 8
●新刊旧刊書評紹介 …… 9
●まちかど …… 10

NO. 73

朽木温泉“てんくう”オープン

倉本　恒一

先日、7月22日に朽木温泉保養休養施設“てんくう”がオープンしました。

初日から大勢のお客さんが入り、職員はタオルやガウンの手渡しや場内の説明、お湯の管理、場内整理などまだ慣れないため混乱しました。入場制限で中に入れずに帰られる人も多かったということですが、それでも休日には入場者が 2,000人を超えることがあるということなので当初計画より遥に超えていることになります。

村と都市との交流施設づくり

朽木村は滋賀県湖西地域の西の端にあり、ブナの原生林や朽木渓谷など豊かな自然に囲まれた人口 3,000人弱の村です。朽木村のほぼ中央を南北に走る国道 367号線は、昔から「鯖街道」として若狭から京都へ海産物の運搬道として重要な役割を果してきました。現在では、京都市内まで車で1時間余りであり、京阪神から若狭方面に向かう観光客の利用が多く見られます。

朽木村は昭和30年後半から過疎化現象が続いているため、昭和60年に村と都市との交流と滞在型レクリエーション施設づくりとして「想い出の森」整備事業に着手しています。

比良山系の 350haの山林を村が購入し、その内1割を行政が開発するという大規模なものです。多目的ふれあいホールやグラウンド、テニス場、キャンプ場、野外ステージ、宿泊・研修施設等々が整備されてきました。

温泉活用施設で新たな目玉づくり

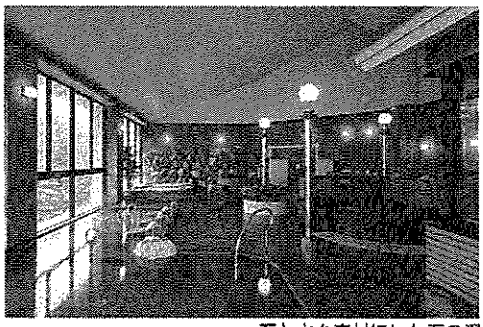
平成4年にこの「想い出の森」の中で温泉掘削に成功し、温泉施設の計画が始まりました。計画コンセプトとしては、①「想い出の森」の既存施設と連携を持つアクティブな温泉活用施設づくり、②ファミリーや小グループをターゲットとして1日を楽しく過ごせる新たな魅力の創出、③緑や清流など自然環境をフル活用した特色をつくることでした。

建物は、既存のセンター施設に隣接する松林に囲まれた斜面地に建てられ、樹木を出来るだけ残すよう2階建にし、地盤をセンター施設より1階分下げ、見晴らしの良い2階は浴場ゾーン、1階はロビー、喫茶ラウンジとプールゾーン、それに屋外の露天風呂がつながります。2階のレベルにあるセンター棟とは地下通路で接続し、既存のレストランの拡張整備も合わせて一体的に利用できるように計画されました。

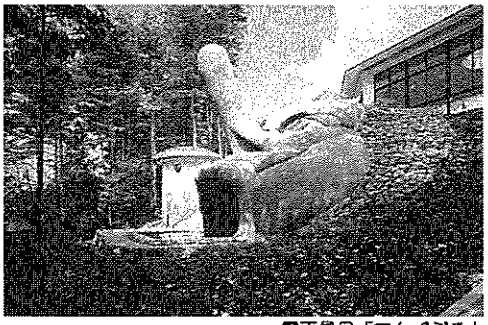
プールゾーンは温水プール、スライダー付き子供用プール、滝湯、渓流湯などの他、屋外には天狗の形をした疑岩づくりの露天風呂ときのこの形をしたサウナルームが木立の中

松林に囲まれのんびり寛げる「てんくう」外観

家族で一年中水泳や水遊びが楽しめる温水プール



石と水を素材にした石の湯
「てんくう」自慢の源泉湯がある



露天風呂「てんぐぶろ」

にあり、洞窟のような天狗の口の中から外を眺めながら入浴したり、きのこサウナで汗を流したり、冬でも雪の中で家族一緒に楽しむことが出来るでしょう。

木と石と水を素材に

浴場部分は「木の湯」と「石の湯」の２種類あり、それぞれ大浴槽の他、圧注・泡沫湯、源泉湯、うたせ湯、寝湯、高温サウナ、ミストサウナなど多様な入浴施設が設けられています。「木の湯」は壁や浴槽が木で仕上げられ、木の香りのする浴場で、「石の湯」は野面石を積み上げた浴槽や壁などで、それらの室内空間は広く開放された窓を通して浴槽の中から寝ながら眺められる外部の松林の景観と一体となり自然に調和した空間になっています。「木の湯」、「石の湯」は定期的に男女を交換して利用されます。

２階の和式の休憩室は開放的な空間で、周囲の木立に囲まれのんびりと寛げる場所です。１階のロビーと２階のホールとは大屋根を利用した吹き抜け空間でつながり、そこに掛かった朱塗りの欄干の太鼓橋を渡って浴場に入ります。

１階の山側は池を配してサンクガーデンとし、擁壁部分には現地で集めた大きな石を積み上げ、自然な崖風に仕上げてあります。建物内外には自然石や木の素材をふんだんに使用し、土壁風の内壁など室内の雰囲気が周囲の自然と調和するようにしています。室内に飾られた「へん木」の衝立や栃の木の一木で彫られたお盆や花瓶など、ここの伝統的な工芸品が見事に光を放っています。

てんくうのネーミング

朽木は杣（そま）の里とも呼ばれ、木が朽ちるほど有るということから朽木（くつき）と呼ばれるようになったと言われています。また朽木村には、昔から天狗伝説が数多く語り継がれており、比良山中には天狗山というのがあり、今でも天狗の面を御神体に祭った祠で年１回神事が行われているそうです。

このような天狗伝説が残る「想い出の森」に完成した今回の施設は、神秘的な森を背景に天狗が天空を舞う雄大さ、天に通じる力（神通力）がこのくつき温泉に秘められているという意味を込めて「てんくう」と命名されました。

「想い出の森」の事業は長期に亘り、一歩づつ進められ、美しい自然を破壊することなく、村のよさを活かした開発事業だと思います。村の中心部で、少し前に造られた「道の駅」での朝市では、客を相手に商売をしたことの無い村人が手作りの漬物や栃餅など普段家で作っているものを出品したら反響があり遠方から常連客が来るようになったということです。このような地味な活動であっても確実に一歩づつ積み重ねていくことで、村と都市との交流が生まれ、新たなその土地の文化が創造され、村に活気が出てくることが期待されます。

（大阪事務所　くらもと　つねかず）

アルパックＣＭづくりにトライ

― ‘95全社研修交流会体験記 ―

石川　聡史

暮らしの中で、様々なメディアを通して氾濫するＣＭ…。それが社会に与える影響や役割は大きい。先頃、某缶コーヒーメーカーのＣＭの「夏だからって、どこか行こうっていうの、やめませんか。どこだって夏なんだから」というセリフが、旅館業界からクレームがつき放送打ち切りになった。何気なく見ていたＣＭだが、ＣＭづくりって意外と大変なんだなぁ…。

恒例の全社研修交流会、今回はアルパック30周年を間近に控え、“創造的ＣＭづくりに挑戦”がテーマである。会場は、全国的にも21世紀都市を目指すプロジェクトとして注目され、また、アルパックの業務のエポックでもある“関西文化学術研究都市”を舞台に、いつもは受け手である私たちが送り手としてＣＭづくりにチャレンジした。

ワークショップから

ＣＭづくりは、「コマーシャル・フィルムづくり」「新聞広告づくり」「オブジェづくり」の３つのジャンルの中から１つを体験。１チーム約10人、各ジャンル２チームで全部で６チームがＣＭづくりに挑戦した。誰がどのジャンルを体験できるかは、当日のくじ引き次第。事前準備、事前学習なしのほぼぶっつけ本番状態で、限られた時間内でどこまでできるかは後のお楽しみ。

ＣＭづくりで重要なポイントは、伝えたいメッセージを明確にし正確に伝え、発信する人と受信する人とがコミュニケーションできることである。これはどのジャンルにおいても共通している。

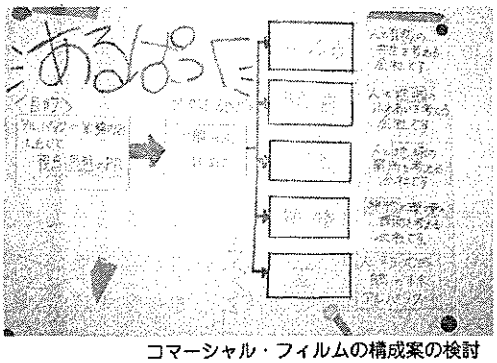
各チームの制作進行には、参加者の意見を自由に引き出し、合意形成に導くためのワークショップの手法を実践。前回の長浜市での研修会“ワークショップによる公園づくり”の経験が活かされてか、準備されていた模造紙には、色とりどりのマーカーでどんどん意見が書き込まれていった。

さまざまに熱中して、競って

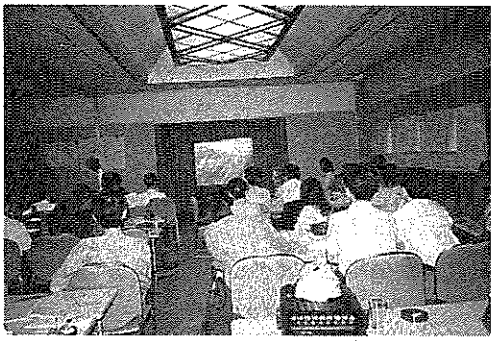
＜コマーシャル・フィルムづくり＞

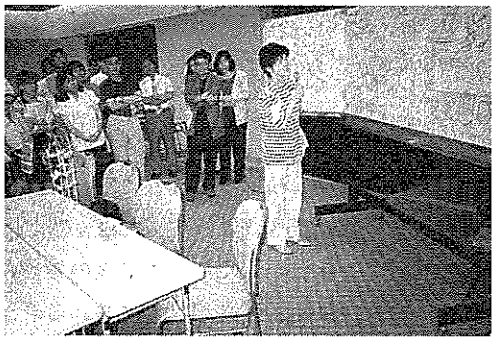
前提条件としてコマーシャル・フィルム（以下ＣＦ）の放送時間は15秒～１分程度として、目的、ターゲット、メッセージ、題材（イメージ、撮影場所）などを決定した後、ストーリーボード（絵コンテ）を作成。撮影のための役割分担（演出、カメラマン、出演者、ナレーター、大・小道具、スタイリストなど）を決め、炎天下、学研都市にくり出し、ロケを開始。

ワークショップによりコンセプトを議論中



コマーシャル・フィルムの構成案の検討


コマーシャル・フィルムづくりの発表風景


オブジェづくりの発表風景
発表ごとにデザイナーの鳥山氏から講評をいただく

＜新聞広告づくり＞

全国紙１頁分の掲載とアルパックの職能と存在と、社会に貢献している様をＰＲすることを前提条件に制作開始。目的、ターゲット、コンセプトを決定した後、イメージスケッチを描き、コピーを考えて等寸で作成。

＜オブジェづくり＞

完成したオブジェは事務所玄関に設置することを条件に進めていく。目的、伝えたいメッセージ（テーマ）を決めた後、イメージスケッチを描き、図面、イラストをつくり、模型づくりを開始する。各グループは紙粘土、ひご、チップ、マーカーなどの材料を使ってオブジェづくりに挑んだ。オブジェには会場に用意された材料だけでなく外の雑草や夜の花火大会の花火なども使われ工夫がみられた。

作品づくりから発表までは昼食時間も入れてわずか５時間足らず。ジャンルによっては、作品完成に至るまでの時間が不十分ではないかと心配されたが、若干の時間延長はあったものの各グループは無事発表にこぎつけた。発表会は若手社員の発表で、和やかな雰囲気の中、活発に行われた。考えてみればこの疑似体験、普段バラバラな者共が、全員参加で上も下も男も女も同等に、意外にも熱中し、競い合っていたのが印象的であった。

ＣＭづくりを終えて

ＣＭづくりを通して、みんなの意見を合意形成することやそれを反映して創造していくことの難しさを学んだように感じる。作品完成までのプロセスには、私たちが仕事を進めていく上でいくつかの共通点がある。色々な工夫をし、多くの人に参加してもらい、多くの人の意見を聴き、それを活かしていくことは、まち（計画）づくりを進めていく上でも必須のことである。今回のＣＭづくりの成果を今後につなげることができればと思う。

講演中の岡本道雄先生

翌日は、(財)国際高等研究所理事長の岡本道雄先生より「関西文化学術研究都市の意義と今後」と題して講演をいただき、ひきつづき、埼玉大学経済学部教授の西山賢一先生より「持続可能な社会・まちづくりをめざして」の講演をいただいた。日本の近代と言うこと、教育・文化の再考の問題、東洋の考え方など私たちがこれからの日本や世界について考えていかなければならないこととともに、複雑系の問題と免疫ネットワークと言う切り口など、示唆深いお話をうかがうことができ、盛り沢山ではあったが有意義な研修交流会であった。

（京都事務所　いしかわ　さとし）

宝塚市震災復興計画に携わって

中室　紋子

1月17日未明、私は豊中の自宅で今回の地震を体験した。まさか阪神で大地震が起きるとは思ってもみなかったが、その後の被害の実態に驚き、また、まちづくりに携わる者がこのようなときに何が出来るのだろうかという思いを抱いていた。

個々の住宅やマンションの再建、そして復興都市計画が大きく注目され、行政が復興へ向けてどのように取り組んでいくのかが気掛かりであった。そんな中で、宝塚市の復興計画に携わることになった。

体力気力の限界の中

市の担当は都市計画課であるが、連日連夜の復旧業務及び復興都市計画に追われつつ、全体の復興計画づくりを行わなければならず、土日返上の打ち合わせが続いた。行政職員の任務遂行の真摯な態度に敬服し、市民の理解もこの努力にあるのではないかと思った。

計画の第一は被害の状況と復興の方法を検討することが急がれた。宝塚は震度7の激震で、死者 106人、最大時避難者約16千人、全壊3,800棟、半壊8,881棟であった。一部地区を除き、神戸・芦屋・西宮のように被害が極端に集中することはなかったが、震災後、市内を貫通する活断層・有馬高槻構造線への不安が市民にあり、地盤条件と被害の関係が問われた。踏査と既往のデータから地盤条件を推測し地盤条件区分図を作成したが、市民に公表すべきかも問題となった。

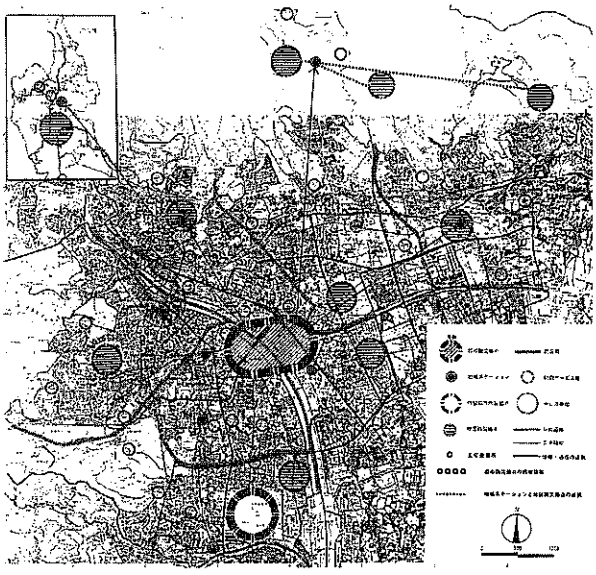
6月決定をめざし

計画策定の流れは次のとおり。2月1日震災復興本部（以下本部会議）が設置され、8日震災復興基本方針（本部会議）を策定。9日3地区の建築基準法84条指定。24日震災復興緊急整備条例案策定（本部会議）。3月17日震災復興関連都市計画の決定・変更。27日震災復興緊急整備条例の公布・施行。29日基本的な考え方策定（本部会議）。31日震災復興促進区域・重点復興地区（4地区）の告示。

そして、同日31日、小笠原暁芦屋大学学長を会長に専門家と市民代表による震災復興計画検討委員会が設置・開催された。以降、同委員会での審議と住民の意見・提言を反映し、復興本部の4部会での協議とともに、県の「ひょうごフェニックス計画」との調整を踏まえて計画の策定となる。期限は県と協調し6月末日決定の超特急の計画づくりとなった。

人命の尊重と宝塚らしさ

震災復興計画は、住宅復興計画など個々の対応等をトータルな市全体の計画として、3カ年、10カ年を目標に定める。いわば総合計



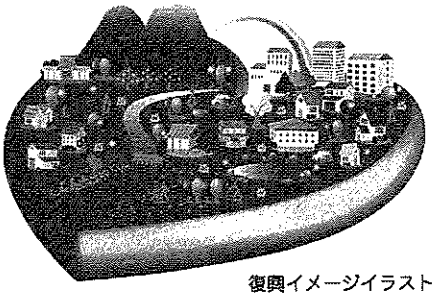
防災拠点・ネットワーク構想図

画の復興版である。個々の対応や全体の計画は県の復興計画と歩調を合わせなければならない。宝塚市の独自性も考えると調整もなかなか大変である。また、意外に隣接市の状況が分からないのにも驚かされた。

この震災で何を失い、復興に向けて何を大切にすべきかが問われ、まちづくりの根幹の議論がなされた。人命の尊重と宝塚らしさの追求が根本だったように思う。しかし、いずれも規定の計画を復興の中で洗いなおす作業で、新たな復興住宅の建設などについては財源の限界が問題であった。

都市整備や施策など、日常の努力が大切

宝塚の震災復興で考えさせられたのは、南口、逆瀬川、宝塚など駅前等の再開発が比較的先進的に進められていたことが、大きな打撃的な被害集中を被らなかったのではないか、ということである。もし、再開発が行われていなかったらと考えると、日常の都市整備の重要性を再確認させられた。また、福祉やボランティア行政が進んでおり、とっさの対応が比較的スムーズに行われていたのも特徴である。これらの経験を振り返り、今後のまちづくりに活かしていくことが必要だと思う。しかし、既に記憶は薄れつつあり、当時の記録作りがまず必要ではないかと思われる。



復興イメージイラスト

パンフレットづくりで、宝塚の復興イメージをイラストに表現した。イラスト原画の制作者は、この震災でお父様を亡くされた。復興への思いを込めて制作されたことも付け加えておきたい。

（大阪事務所　なかむろ　あやこ）

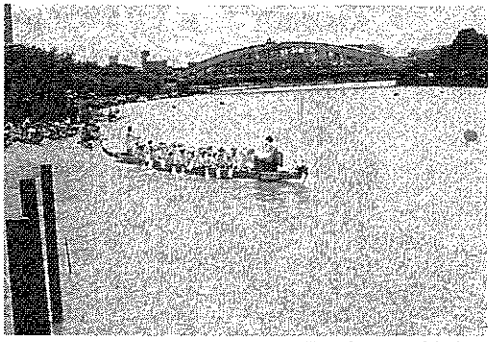
きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況

ドラゴンレース健闘記 ～めざせ３年Ａ組～

嶋崎　雅嘉

昨年に引き続き大阪の夏を彩る天神祭りの宵宮に行われるドラゴンレースにアルパック所員とその友人、そのまた友人等で結成されたチームが参加しました。

レースの正式名称は「日本国際龍船選手権大会」で男子の部の優勝チームは世界選手権への出場権が与えられるという大きな大会なのです。我々は昨年同様、白いＴシャツに赤白帽スタイルで男女混合のレースに出場しました。チーム名は「２年Ｂ組」。２年目で実力はＢクラス（昨年は初出場ながら準決勝進出、38チーム中13位と健闘）という意味なのですが、裏にはいつかはＡ組になろうという企みがあるのです。



優勝めざしていざ出陣!!

レースの合間に木陰でひと休み

今年は月曜日に開催されることもあり、本気で参加してくる強者精鋭ばかりが出場するということで、苦戦が予想されていましたが、昨年の実績（？）と若さ（？）を頼りに選手一同、心を一つにして（これがドラゴンレースでは一番大切）レースにのぞみました。

先ず予選では強豪ひしめく組のなか、我が２年Ｂ組は５着と惨敗。次は敗者復活戦です。復活戦では２着までに入れば準決勝に駒を進めることができます。結果は３着。なんと２着と 0.3秒差。（おしい！）この時の悔しさは一生忘れません。そしてとうとう順位決定戦です。ここで負けるわけにはいきません。来年はＣ組になってしまいます。最後の力を振り絞って櫂をかき、堂々の１着。最後は気分良く今年のレースを締めることができました。

その後皆で行った銭湯は気持ち良く、湯上がりのビールの美味さは格別で、心地よい疲労感のなかでクルーは、日焼けした顔を突き合わせ、来年の健闘を誓い合ったのでした。

（京都事務所　しまざき　まさよし）

うまいもの通信⑱

地元のお酒を飲んでみよう

安藤　謙

これから秋にかけて食べ物のおいしくなる季節、暑い日のビールとはひと味違う日本酒を味わうにはもってこいの季節です。

酒どころといえば兵庫、京都、新潟などが思い浮かびますが、年や地域によって味も香りも違うようです。灘五郷では阪神大震災の影響を受けた蔵も多く、震災前に３年ほどかかって刊行した西宮市水道史の関係で西宮・今津郷や宮水について調べたこともあり、再開を祈念しております。

日本酒は精米の仕方によって本醸造や純米酒、吟醸酒などの種類があり、吟醸酒などはお米の上質ワインのような味と香りを楽しむことができます。全国各地には小さいながら独自の酒造りをする酒蔵が多くあり、なかなかおいしいお酒を造っているところがあります。名古屋市内にも造酒屋が５カ所ほど、うち２～３カ所は直接味わう機会があり、おいしいお酒を造っていることを知りましたが、普段小売店で見ることはできません。

私は同じ愛知県内の東三河地区にある「蓬莱泉」という比較的値段が安いお酒を愛飲しています。これは吟醸酒などの良いお酒ではありませんが、風味の良いあっさりした呑み口です。ここには「空（くう）」という吟醸酒があり、市内の飲み屋さんも滅多に手に入らないと言います。別の造酒屋には「天」というお酒があり、値段は張りますが味は高級ワインに近いものもあり、いずれも豊橋駅で手に入ります。

しかし地元では、これらの酒蔵のお酒より他の地域のお酒が飲まれています。流通ルートの関連で小売店や飲み屋さんに入らない場合が多く、地元の良さが見えなくなりたいへん残念に思います。地域の食べ物の特色が薄れ、造酒屋の減少する現在、銘産品を地元で造りあげることは大切なことだと思います。みなさんも一度自分たちのまわりにある酒蔵や酒屋さんを訪ね、日本酒の良さと地域のお酒の味を味わってみてはいかがでしょうか。

（名古屋事務所　あんどう　けん）

新刊旧刊書評紹介

百田　建夫　著　　みくに出版

『ラーメンの街に日が暮れて』

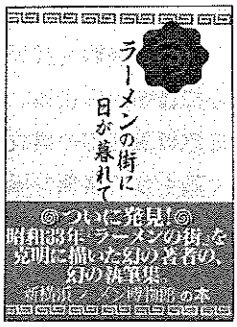
紹介　望月　博司

このコーナーは、書籍の紹介となっていますが、本書の舞台となっている「新横浜ラーメン博物館」の“味”についても併せて紹介します。

ラーメンの街に日が暮れて

本を手にとって驚かされるのは、内容よりも装丁です。古本屋にでもありそうな、「セピア色にやけたページやシミ」、文章中の所々にある「ひっくり返った字」、「逆さまに印刷されたページ」など。シミを見ると印刷技術でこんなことができるのかと感心させられますが、担当者は大変だったでしょう。帯には、「シミや汚れはワザとつけたので、ハネたり返本しないで下さい」「店頭に並べるときは、この帯をはずして下さい」と書店に向けたメッセージが書かれています。実はこの本、昭和33年に出版され、新横浜ラーメン博物館の地下に再現された架空の町（鶴亀町、鳴門町、蓮華町）でおきた出来事を、当時発行された新聞や機関誌から寄せ集めたという少々ややこしい設定となっているため、わざとこのような演出を行っているのです。内容は、町の成り立ちから始まり、住民の家族構成、年齢等が書かれた住民録、住民が繰り広げるドタバタ話が展開されます。そして、最後に当時全国でおきた出来事を年表にまとめています。この本を読んでからラーメン博物館へ行けば「これが、ニセ札騒ぎのあった“しんせい商店”か」とか「これがジョージが蹴破った“どん底”のドアだな」といった楽しみ方もできます。ちょっと変わった、ラーメン博物館の公式ガイドブックと言ったところでしょうか。

新横浜ラーメン博物館



本の舞台となっているのが、新横浜ラーメン博物館です。雑誌等でご存じの方も多いと思いますが、平成６年４月に開館、１階には、全国から集めたどんぶりや割り箸の展示、ラーメンやキャラクターグッズが販売されています。そして、地下１、２階に昭和33年当時の町並みがリアルに再現されています。ほこりや汚れも塗装で再現され、古くて動きそうにない自動販売機もちゃんと使えます。この町には、８軒のラーメン屋がありますが、私が行ったときは、「あっさり」系より「こってり」系のお店が混んでいました。個人的には、「すみれ」のみそラーメン、「一風堂」の博多ラーメンをおすすめします。

このラーメン博物館、入場料を払う必要があります。「入場料を払ってもラーメンが食べたい」と思わせるには、今後それなりの集客努力を行う必要があるでしょう。全ての店のラーメンが食べられるような量の少ないラーメンは、各店のメニューにありませんが、これはリピーター確保のためでしょうか？

昔の町並みの再現には、かなり凝っているにもかかわらず、個々の店の中に入れば、どこにでもあるラーメン屋になってしまうところが残念でした。

読書嫌いの私としては、本よりもラーメン博物館をおすすめします。

（東京事務所　もちづき　ひろし）

まちかど

復興のまちの風景

馬場　正哲

阪神・淡路大震災の被災地では、行政を中心に復旧から復興、２カ月での都市計画決定、応急仮設住宅の建設、倒壊建物の撤去、息継ぐ暇もなく復興計画の策定、そしてようやく各市の基本的な計画が決定されてきた段階です。思えば光陰矢の如し、既に被災地の一体感は過去のこととなり、被災者とそうでない人とが同居した日常が始まっています。しかし、個々の復興はまだまだこれからです。

そんな被災地でのスナップを紹介します。

広大な空地が出現

被災家屋は全壊家屋だけでなく半壊家屋も解体撤去されていき、至る所大きな空地が出現しています。悲惨な風景は消えていきつつありますが、そんな中で「借地権存続」の看板などがことの深刻さを思い起こさせます。（写真１）

仮店舗は花屋さんが元気

商店街では、個々のお店がプレハブやコンテナーなどの仮店舗で営業を始めています。その中で、気のせいか何処でも共通して、お花屋さんが元気なようです。（写真２）

瓦屋根がスレート葺きに変身

半壊や軽度な被災家屋も徐々に改修が進んでおり、生活の息吹も感じられるようになってきました。しかし、応急復旧のせいか本瓦の日本家屋がスレート葺きの屋根に変身、いつも見られた甍の街なみに違和感を生み出しています。（写真３）

（大阪事務所　ばば　まさあき）

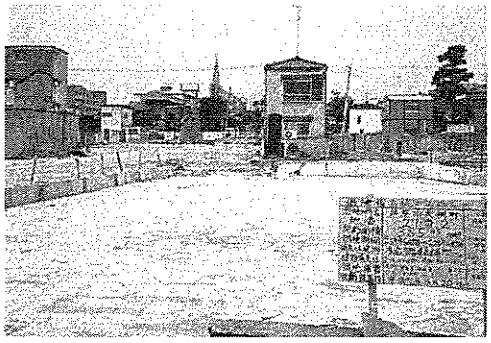


写真１：芦屋市大桝町三八通り商店街

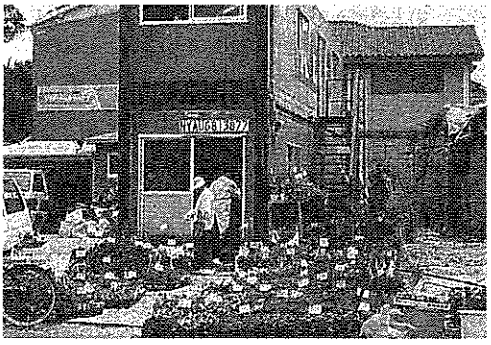


写真２：同　上

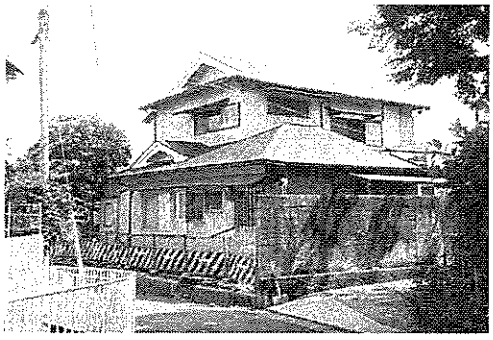


写真３：芦屋市内の住宅地にて

アルパック（株）地域計画建築研究所

●本　　社
●京都事務所　〒600京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F／TEL(075) 221-5132　FAX(075)256-1764
●大阪事務所　〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F／TEL(06) 942-5732　FAX(06)941-7478
●名古屋事務所　〒460名古屋市中区丸の内3-18-30・ツボウチビル2F／TEL(052)962-1224　FAX(052)962-1225
●東京事務所　〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401／TEL(03)3226-9130　FAX(03)3226-9560
●㈱九州地域計画研究所　〒810福岡市中央区天神1-15-1・日之出ビル6F／TEL(092)731-7671　FAX(092)731-7673
●㈱アルパックインターナショナル　〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F／TEL(06)965-2012　FAX(06)965-2014
●㈱都市居住文化研究所　〒604京都市中京区東洞院通り六角上ル三文字町225・朝陽ビル4F／TEL(075)252-2231　FAX(075)252-4417